



3月の進路行事予定

1(月)	卒業式
3(水)	後期募集学力検査
4(木)	後期募集採点
5(金)	後期募集採点 (AM)
6(土)	春季特別講座①②
7(日)	春季特別講座①②
8(月)	代休 公立大学中期試験
10(水)	生徒協議会
12(金)	合格発表 国公立大学後期試験
19(金)	新入生オリエンテーション
22(月)	生徒総会 (PM)
23(火)	球技大会
24(水)	進路講演会① 合格者体験談①② スタディーサポート②
25(木)	終業式・離任式 大掃除
26(金)	学年末休業開始

※○数字は学年を示します

<共通テストから志望校の出願までを振り返って>

令和3年のはじめての**大学入学共通テスト**は「例年通り」が通用しない試験となりました。昨年来、この進路だよりでもたびたび触れてきましたが、大きな混乱の中、名称のみならず入試の内容そのものにも度重なる変更が加えられ、そうした変更さらに追い打ちをかけるかのように、新型コロナウイルス感染症の拡大に伴う日程の変更が加わり、今年受験生は先が見えない状況の中、手探りで共通テストから志望校の出願までを行うことになりました。

本校の3年生は**全員、メリットが多いと考えられる第一日程を選択**し、共通テストを受験しました。今年はコロナ禍のため、教員や保護者は特別な場合以外は会場構内に立ち入ることができないとの通知を受け、会場での激励は県下すべての高校で行いませんでした。試験の両日は、3学年主任と進路主任が学校に待機し、万が一に備えましたが、幸い天候にも恵まれ、生徒たちはほぼ予定通りに受験することができました。

第一日程終了後、すぐに自己採点を行い、各予備校等にデータを送付しましたが、最初の段階では出題形式の変更により難易度が上がり、平均点は下がるのではないかと予想していました。しかし、予備校等の集計や大学入試センターの中間集計などの結果を見ると、**平均点は文系が551点(得点率約61%)、理系が561点(得点率約62%)** <ともに得点調整前の段階>と、前年のセンター試験と比較すると、文系+3点、理系+2点となり、大方の予想に反して**文系・理系ともに平均点アップの見込み**となりました。今年は理科と公民で科目間の平均点の差が大きかったため、得点調整が実施されましたので、その増加分を含めれば、さらに平均点上がる(文系で+4~6点、理系で+13~17点)ことが考えられます。

ベネッセと駿台のデータネット、河合塾のデータリサーチなどの結果から、1月22日~27日の間に担任、学年主任、進路主任で**出願検討**を行いました。一人ひとりの志望校に対して判定を見ながら、2次試験に対応できる学力があるかどうか、志望者の集り具合はどうか、といった面に加え、県外に進学できるのか、浪人することが可能かどうかなど、担任の先生が生徒・保護者から聞き取った家庭の状況も含めて、丁寧に検討を行いました。条件が厳しく、出願検討に苦慮することもありましたが、**一人でも多くの生徒の進路実現を願い**、担任の先生には、できる限り合格可能性の高い大学への出願を生徒にアドバイスしてもらいました。

検討から出願と順調に進めばよいのですが、ここでもコロナが影響を及ぼします。コロナによる緊急事態宣言の延長などを条件に、前期の個別試験を実施せず、共通テストの成績を利用するしたり、面接を実施しないことに決めたりと**直前になって入試変更を発表する大学**が出てきたのです。入試変更は受験生に非常に大きな影響を与えるため、変更を行う場合は、原則として2年前には予告しなければならぬというルールが定められています。今回のような事態はコロナ禍で仕方ない面もあるとはいえ、受験生にとっては大きな負担となり、次年度以降はぜひ改善してほしいところです。

<共通テストは何が変わったのか?>

昨年までのセンター試験と共通テストは、**形式的にはそれほど大きな違いはありません**。しかし、**出題にはかなり変化**が見られました。全体的な印象としては、**問題文の分量が増え、日常生活に題材を取ったり、複数の文章を比較するような出題がされたりしたこと**などが挙げられます。つまり、問題の設定がセンター試験よりも複雑で、全体の分量が増えたために、**読解力**はもちろんですが、**大量の情報を素早く処理する情報処理能力**が、以前よりもさらに求められるような試験に変わったと思われます。こうした出題に対応するためには、教科そのものの学力は当然必要なのですが、定められた時間内に、必要な情報だけを拾いだして要領よく問題を解く姿勢が欠かせません。得点が取れない受験生は、前半の問題に時間をかけ過ぎて、後半の問題まで解ききれないというようなことがよくあります。特に英語はリーディング・リスニングともに語数の大幅な増加や実用的な場面設定などが目立ち、1回読みの導入により、従来のセンター試験よりも負担の大きい試験になりました。**読解力と情報処理能力を向上させることが必要**となるでしょう。しかし、気を付けたいのは、**国公立大の個別試験**は共通テストとは異なり、**じっくり考えて、記述するようなタイプの問題**であることです。つまり、これからの受験対策には**共通テスト的な学習と個別学力試験に向けた学習の2つにきちんと取り組む必要がある**と言えます。

<進路を考えるヒント：神成さんの居ない「学校依存社会」>

先日、時事通信社発行の「内外教育」という教職員向けの読み物に、気になる記事を見つけました。タイトルは「教師による取り締まりと学校依存社会」。筆者は「金髪のエデュケーション」で有名な名古屋大学大学院准教授の内田良さんでした。記事の内容は、まず内田さんがある高校を訪問した時のことから始まります。内田さんが用事を終え、窓口になった先生と一緒に夕食を取ることにになり、最寄り駅まで歩いていたところ、ある生徒とすれ違ったそうです。その際、同行の先生が生徒に親しげに声をかけながら、シャツの襟もとをつまみ、ボタンが開いていることを指摘しました。この出来事に内田さんは「学校の外であっても教師が生徒の行動や振る舞いに関与しなければならないのか」ということに大変な驚きを感じたと記しています。記事はさらに踏み込んで、公立高校の教員には、法的には時間外労働という概念がない（「超勤四項目」を除く）ため「定額働かせ放題」になっていること、夏休み中のお祭りでは、夜であっても教師がパトロールに出回っていることなどが記され、学校の管理責任は一体どこまで及ぶのかを論じています。内田さんは2019年1月の中央教育審議会の答申に基づき「子供が学校の門を出れば、それは保護者に子供を返したことになる。まして土日や長期休暇中ともなれば、学校の権限は全く及ばず、保護者の管理責任が問われる。」と…。「ところがそうはなっていないのだ」と続きます。「街の中を歩く生徒の姿を「だらしない」と感じた住民は、自分で生徒を諭すこともなく、また保護者を探し出すこともなく、学校に文句を言う。フードコートで生徒が長時間にわたっておしゃべりしている。お店からの苦情を受けて、教師が謝りに向かう…」といった状況が述べられます。確かに、本校でも近隣の商業施設から似たようなお電話をいただくことがありますので、同様な状況はどこでも起こっているものと考えられます。記事の後半で、内田さんは「学校こそが子供の行動を取り締まり、それを保護者や地域住民も当然のことと見なしている。こうした、社会の構成員が子供の広範な管理を学校に求めようとする社会を、私は「学校依存社会」と呼んでいる。」と述べます。

さて、記事の紹介が長くなりましたが、この記事の内容を皆さんはどのように感じますか？私は教員として長く学校の中から世の中を見てきましたので、ものの見方が偏っているかもしれませんが、しかし、よく言われるように「教育の受益者は社会全体である」という考えには満腔の同意を与えます。であるとすれば、若者を教育して大人にすることはもちろん、学校が担う部分でもありますが、**社会全体の責任**でもあるはずで。何か目の前の子供に問題があれば、それを目にした大人が適切に対応すべきだと思いますが、なんでもかんでも学校に対応を迫ってことを済ませようとするのであれば、それは「学校依存社会」というより「責任放棄社会」だといった方が適切なのではないでしょうか？

一方で、学校もどこまで生徒の行動を“取り締まる”べきなのか、という問題も同時に考えなくてはならないでしょう。「ブラック校則」と呼ばれることで問題が表面化した感がありますが、これは「学校依存」の考え方と実はコインの表裏のような関係にあるのかもしれませんが、もし、**社会が子供の行動に責任を持つ**のであれば、学校の“取り締まり”は必要最小限になり、ブラック校則と言われるような事細かな（時には理不尽な）決めごととも減少していくでしょう。でも、社会が学校に依存（責任を放棄）するのであれば、学校はどう振る舞えばいいのでしょうか？**面倒なことは学校に押し付けながら、一方で学校の指導は越権的だと批判するなら、教員はどうすればいい？**というのが偽らざる気持ちです。

『ドラえもん』で野球のボールが近所の家の窓ガラスや盆栽を割る場面があります。家主の**神成さん**は「バカモン」とのび太にカミナリを落とすのが定番の流れですが、今なら、神成さんも学校に電話するのでしょうか？近所の怖い「おとな」が居なくなったことに寂しさと危機感を感じるのは、私だけではないはずで…

NO IMAGE

◇1・2年生の皆さんへ ～この時期の過ごし方～

3月6日(土)・7日(日)の2日間に実施される**春季特別講座**には1年生、2年生ともに最大定員数を満たす申し込みがありました。今年、鳥光宏先生（駿台予備学校）に1年生の古文を、新たに代々木ゼミナールからは西川彰一先生（英語）と藤田健司先生（数学）に2年生の講義をお願いしております。2日間の集中講義という形式ですが、長年予備校で活躍されている各先生の講座は、今後の学習への大きな刺激になるものと思います。事前にテキストが配付されますので、予習をしっかりと、積極的な受講をお願いします。また2年生は、**3月24日にスタディーサポート**が実施されます。この試験は、これまでの学習がどの程度定着しているのか、また応用問題や発展問題に対応できる力が身についているのかを判定できるテストです。ぜひ、これまでの学習と学習習慣の振り返りとして有効に活用してほしいと思います。

定期試験終了後から新学年を迎える4月までの期間は、**次年度をスムーズに迎えるための大切な期間**でもあります。落ち着いた生活を心がけ、学習面、生活面ともに新年度への準備をしっかりと進める工夫をしてください。